



道しるべ

道德通信

上尾市立太平中学校
道德通信 第7号
令和5年12月15日(金)
発行者 校長 井浦 博史

「生きる意味って何ですか？」

1学年担当

先日、「生きる意味って何ですか？」と生徒に聞かれた。どこかでそんな話題が仲間内か何かで出ていたらしく、こちらにも聞いてみたのだろう。生物学的には、「種の保存」・「子孫を残す」ということが正解なのだろう。

『生き物の死にざま』という本には、カゲロウについてこんな記述がある。

カゲロウの成虫の寿命は1日どころか数時間である。成虫になると食べるための口も退化して失っていて、ただ子孫を残すために仲間を探す。仲間に出会えたものも、志半ばに鳥やコウモリに捕まったものも、卵を産めたものも、その前に魚に食われたものも等しく数時間で死んでいく。子孫を残せなかったカゲロウは無駄死になのだろうか。敵と戦うかも、逃げるための素早く動ける羽もないカゲロウは生き残るために大量発生という道を選んだ。数で敵を追い払うのではなく、仲間の犠牲のもと生存したものが命をつなぐのである。個体としてではなく、種全体として子孫を残すのである。

この本には他にも生物の生き死にについてが、書かれている。

喜劇俳優のチャップリンの残したこんな名言がある。「クラゲにだって生きがいはある」

生きていくことは素晴らしいことだ。それはクラゲであっても変わらない。生命にとっては、

クラゲにとっては、生きていくこと自体が生きがいなのである。

文頭に描いた「生きる意味って何ですか？」で求める答えは、おそらく「種の保存」といった通り一遍のものではなく、その人その人で異なる生きがいや考え方を知る質問なのだろう。どんな答えが集まったのだろうか？



『ころべばいいのに』

アピースマイルサポーター

私には小学生の娘がいます。思春期に入ってきた6年生の娘は、朝の読み聞かせで読んでもらって、「少し気持ちが楽になった。」と言っていた、私も大好きな絵本を紹介します。

「わたしにはきれいなひとがいる。なんにんか、いる。」

そんな書き出しから始まるヨシタケシンスケさんの『ころべばいいのに』は、嫌な人や嫌いなことにどう対処していけばいいのだろうかを、女の子が真剣に考える様子をユニークに書いたお話です。

みんなと仲良くできればそれが最高だけど、大人だってどうしても仲良くなれない人がいることもあるし、嫌いなこともあります。私はこの本を読んだ時、苦手な人がいてもいいよ、こういう考え方もあるよと言ってもらったような気持ちになりました。

学校の図書室にもあるので、気になった人は手に取ってみてください。



時には蕎麦のように「細く長く」

3学年担当

私は子育てをしながら教員という仕事をしています。子供が病気で急に仕事を休まなければならなかった時など、生徒や周りの先生たちに申し訳ない気持ちになり、教員を「辞める」という選択肢が頭の中に浮かんだこともあります。それでも、今日ここまでやってこられたのは周囲の理解と協力あってのことだったと思っています。その中で今日に至るまで心の中でおまじないのように唱えている言葉があります。それは「細く長く」という言葉です。大晦日に年越し蕎麦を食べるのも、この蕎麦の細くて長いという特徴を長寿と重ね合わせたとはいわれています。蕎麦を食べながら長く生きられますようにと願うようです。

やはり子育てをしながら働いていると時間の制約は避けられません。自分で思うように時間を使うことが出来ないのが困ることもあります。それでも子育てとの合間にできた時間に仕事をするという習慣を身につけて教員という仕事を続けていると、きっと辞めてしまっただけでは気付かなかったことや当時理解出来なかったことが分かるようになってきました。それが最近面白いと思えるようにもなりました。

皆さんも、受験勉強や部活など忙しく毎日をご過ごしていますね。そんな中で、「これだけは！」と思えるものを見つけて少しの合間でも時間を積み重ねてやり続けていくことで、その意味を見出せる日がいつか訪れると思います。

いよいよ2学期も終盤です。年越し蕎麦を食べる時、こんな話を思い出してもらえれば幸いです。皆さんにとって、来年も良い年となりますように。



震災から学ぶこと



2学年担当

今年は関東大震災から100年ということで、9月1日前後にはテレビでも震災関係のことがたくさん報道されました。また、学校でも避難訓練の際に関東大震災のことが紹介されました。

私が見た番組では、火災の被害が大きくなった理由を丁寧に説明していました。

台風が近づいていて強風が数時間吹き、さらに風向きが変わったことや、火災が大きくなることを想定できず避難が遅れたり、家財道具を持って非難したりする人が多かったことなど、いくつかの要因が重なり被害を大きくしたと報じていました。100年たってもこの震災の経験から、「地震が起きたらまずは火を消す」ということが言われているようですが、最近は「自分の安全を確保してから火の確認」が重視されているそうです。

番組ではもう1つ重大なことを取り上げていました。震災時に池や井戸の水が濁ったのを見て、朝鮮人が毒を投げ入れたというデマが広まり、多くの人々が虐殺されたという事件についてです。東京大学の佐藤健二教授によると、非常時にデマが出るメカニズムとしては、多くの人々が恐怖や不安を抱えている中で、1923年当時にはラジオがない、新聞社も正しい情報を集められない、電話も断線し使用できないといった非常時の中で、情報が暴走したと考えられるそうです。

私はこの100年前のできごとから、正しい情報を見極める力を持つことの大切さを改めて感じました。また、その後、日本を襲った阪神淡路大震災や東日本大震災の際には多くのボランティアの活動が話題になりました。人を阻害するのではなく、力を合わせることで恐怖や不安を乗り越えた事例です。

